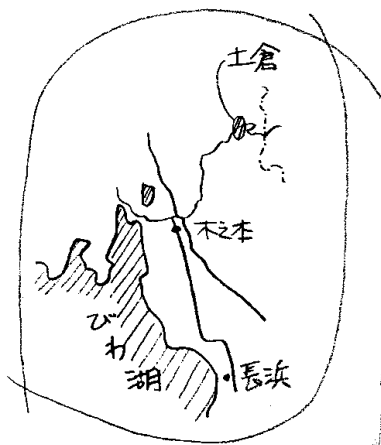


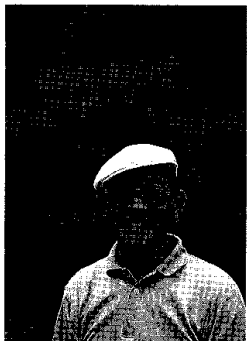
湖国唯一の鉱山

土倉鉱山探訪

夏草を
ガゴソ狸
鉤(はく)の跡

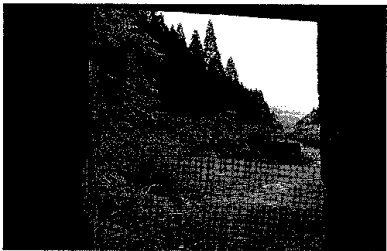


鉤…(鉱山の)良質な
鉱脈のこと



▲白川雅一さん。選鉱場跡では、2mの段差をヒョイと飛び降りる元気さ。

▲トロッコで採掘に向かう人たち



▲ここから、右奥に見える山の方に向かって、索道がついていた。

国道三〇三号線は杉野川に沿って山あいをめぐり、八草峠を經て岐阜県坂内村に通じている。道沿いに点在する音羽、杉野、金居原などの集落の一番奥にあったのが、今は廃村となった土倉である。このあたり、冬には二メートルの雪も珍しくないところだ。

土倉には、全国的にも有名な銅鉱石の採掘場があった。地下深く坑道を掘った鉱山としては県内唯一で、最盛期の昭和三十年前後には、月に五千トンを探掘し、数百人が働いていたのだ。明治四十年に始まり、昭和四十年に閉鎖された鉱山跡を、土倉の生き字引き、白川雅一さん(77歳)に案内していただく。

■土倉出口

七月初めのむし暑い日だ。地元の漁協による「禁漁」の看板が、杉野川のアユ漁解禁に近いことを知らせる。

木の本地蔵などがある町の中心部から十数キロ、八草峠を越えてきた岐阜ナンバーの車とすれ違ふと、「土倉鉱山跡」の表示版が目にとまった。このあたりが土倉出口と呼ばれ、鉱山会社の事務所や診療所、映画館などがあったところだ。標高は三百メートルあまり。運動会なども行われた広場跡を指さす白川さんだが、閉山後に植えられた杉林が立派に育ち、当時の面影はすっかり消え失せてしまっている。

■選鉱場跡から第二通洞坑へ

ここから北へ未舗装の土倉谷を進むと、右手に大きな選鉱場跡がある。地下で採掘した鉱石を、有用な鉱物と役に立たない石とに選り分けたところだ。四十人ばかりが働いていたとのこと、第二通洞坑をトロッコで運ばれてきた鉱石はここで下ろされ、ウインチで最上部へ上げられた。細かく砕かれた鉱石は「浮遊選鉱」により選別され、空中索道(延長十三・二km)で木之本駅近くまで運搬された。そして貨車に積まれて九州へ向かったのだ。